

奈良女大 家政 ○孫 珠熙, 小松かおり, 丹羽雅子

目的; 韓国の民族固有の服装である韓服は, 基本的な様式においては高句麗, 百濟, 新羅の三国時代以来千数百年間その形式が守られ, 現在もなお礼服として着用されている。本研究では, 伝統的な韓服地および新しい合織から成る韓服地を多数収集して, その基本的な力学的特性を計測し, 韓服地の力学的性質ならびに風合いの特徴を明らかにし, 韓服のシルエットと関連づけて考察する。更に, 衣服構造が定形化している日本の伝統的な和服地, 多種多様のシルエットを形成する婦人洋服地の同特性や風合いとも比較する。

方法; 収集した試料は, 秋冬用159種はその大半が洋緞・貢緞・ニエトンなどの朱子織物, 夏用69種は熟庫紗・甲紗・羅などのからみ組織, その他合計237種である。収集に際し広範に素材や品種が網羅するように配慮した。比較には和服地として後染織物・先染織物, 洋服地として婦人用薄手布・中厚手布を用いた。力学的性質の計測はKES-Fシステムを用い, 婦人洋装用薄手布の力学値-風合い変換式を適用して風合い値“こし”“はり”を求めた。

結果; 韓服地の単位面積当りの重さ・厚さは秋冬用は夏用の約2倍の差をもつにもかかわらず, 曲げ剛性は $0.06 \pm 0.03 \text{ gf} \cdot \text{cm} / \text{cm}$ の極めて狭い共通した範囲をとり, なかでもよこ方向の曲げ剛性の大きいことが特徴的で, これらは韓服のシルエットに関わる重要な特性であることが推察される。韓服地の曲げ・せん断変形特性は共に婦人用薄手物の平均より約1.5倍の大きい値に平均値を持ち, 和服の後染織物とほぼ一致する傾向が認められた。韓服地の風合い値“こし”“はり”は共通した狭い範囲の値をとり, “こし”は6~7, “はり”は7~8と強い値をもつ特徴が数値的に得られ, 品種・素材別にもこれらの特徴が明らかになった。